

## 警察官のResilienceに関する臨床心理学的研究

—Resilienceにおける「意味づけ」と「生きる意味」に焦点をあてて—

GH091003 : 笹 原 奈々子

指導教員 : 久留 一郎 教授

### 【問題・目的】

近年、救援にかけつけ、過酷な任務を背負う救援者のストレス(CIS: Critical Incident Stress)が注目を浴びており、またCISが高じるとPTSDを発症する可能性がある(餅原, 2006)。その救援者の中でも、警察官の職務には外傷的な出来事に直接曝露される体験と外傷体験をもつ人の語りを聞くという形で間接的に曝露される体験をもつ点が挙げられる(上田, 2010)とされるなど、警察官の職務は非常にCISを高じやすい状況にあると考えられる。さらに、上田(2010)は「わが国における警察官の外傷性ストレス研究はわずかである」と述べ、警察官を対象としたストレスに関する研究の必要性があると考ええる。

またCISが高じると発症する可能性のあるPTSDでは、トラウマ体験からの回復に関して、Resilienceという概念を用いた研究が行われている。Resilienceには、復元力や回復力という訳がなされ、岡野(2009)は「レジリエンスに関する研究は、外傷をこうむった人の自然治癒過程のメカニズムをさらに知る上で役立つ」と示す。また様々なResilience因子を調査する研究の中で、Harvey(1996)はトラウマ体験におけるResilience因子の一つに「意味づけ」があると述べた。トラウマ体験から引き起こされるPTSD症状では、死に直面させられる体験をしている場合が多く、その体験の「意味づけ」が“死”や“生”と非常に密接していることが推察できる。V.E.Frankl(1952)も、自身のトラウマ体験ともいえる出来事から「生きる意味」を述べている。しかし、このようにResilience因子の「意味づけ」と「生きる意味」とには深い関連性が考えられるが、それに着目した研究はほとんど見当たらない。岡野(2009)は、「レジリエンスや自然治癒力が発揮されるプロセスには極めて大きな個人差があり、それが発現されるべき独自のプロセスがある」としており、一人ひとりが語る生の言葉を大事にしながら、トラウマ体験からの個々のResilienceを

捉える際に「意味づけ」と「生きる意味」が重要な意味をもつと考えられる。

そこで本研究ではResilienceを『防御・回復因子の要素と、防御・回復に向けた力動過程(加藤, 2009)』と定義し、Resilience因子の「意味づけ」と「生きる意味」に関連があるという仮説に基づいて、警察官個人の「意味づけ」や「生きる意味」がどのようにResilienceに影響していくのかを、調査協力者のインタビューをもとに考察することを目的とする。

### 【方法】

**調査協力者** 警察官: 16名(男性:14名, 女性:2名)。そのうち、今回の調査では「生きる意味」との関連をみるために、職場での凄惨な体験と個人の生き方について、分析するに十分な語りが得られた男性警察官6名を分析対象とした。

**調査期間** 2010年9月初旬～9月末(質問紙調査), 2010年10月初旬～11月末(インタビュー調査)。

**場所** 面接場所は調査協力者の職場のプライバシーが確保できる場所で行った。

**手続き** 調査協力者側の担当者に研究の趣旨や倫理的配慮を説明し承諾を受ける。その後、担当者より質問紙等を同封した書類を、個別に調査協力者に渡し、調査協力者より直接筆者に返送してもらう。また、配付する質問紙には、調査倫理についての資料と調査は任意であることを提示した上で、調査協力者が氏名・連絡先・希望面接日を記入する欄を設けた用紙を同封した。その後、承諾を得た調査協力者に半構造化面接によるインタビューを実施した。

**予備調査(質問紙調査)** 質問紙は、フェイスシート(年齢、性別、部署、勤務年数)、PILテスト改訂版(PIL研究会, 1998)を使用。

**本調査(インタビュー調査)** インタビューを行うにあたり、基本となる質問項目を作成した。質問項目は主に①現在・これまで関わった職務内

容、②今まで関わった職務の中での凄惨な体験、③警察官を続けてきた中での自分の変化、④なぜ警察官という仕事を続けるのか、⑤これまでの生き方（家族や趣味、印象的だった思い出等）について、予備調査で得た質問紙のPILテスト改訂版（Part - B, C）を使用しながら話を伺った。なお、質問項目②～⑤については、調査者が日本語版MTRRリカート尺度（村本 監修・亀田・渡邊・ロンバート，2006）のResilienceの1因子とされる「意味づけ」の質問項目一覧表を手元におき、調査協力者の話の中から、各質問項目の内容に近似したものが示されるか否かを判断しながらインタビューを行った。これらの質問項目は、調査協力者の話の流れに合わせて順不同になる場合もあり、約1時間のインタビューを行った。本調査開始前に、改めて各調査協力者に録音・メモ等の許可の承諾を得て、倫理的配慮を徹底するよう心がけた。

**分析方法** PILテスト日本版の分析については、調査者が評定と分析を行った。インタビュー調査の分析は、調査者が逐語記録を作成し、KJ法を参考に、エピソードを3つの視点、①凄惨な体験をどのように捉えたか、②警察官という仕事をどのように感じているか、③個人の生き方・ご自身についてどのように捉えているかに分類して合評を行った。さらに、そのエピソードからMTRRの意味づけ領域の質問項目を参考に、個人のResilienceにおける意味づけのプロセスについての考察を行った。

### 【結果と考察】

本研究では、警察官のResilienceにおける「意味づけ」や「生きる意味」について6名の検討を行ったが、特に共通してみられた「意味づけ」に「使命感」があることが見出された。惨事体験を被り易い職務であるが、日々その職務をはたしていくためには、事件・事故の防止や解決を目的とする警察官の職務の特殊性が反映された「使命感」があるからである。しかし、その共通した「使命感」には、個人のこれまでの「生き方」や「信念・信条」などが影響する「生きる意味」が関与し、独自の動的なResilienceを築きあげていることが示唆された。

本研究で得られた独自のResilienceのプロセスを知る中で、個人のResilienceを見出し、成長さ

せていくためには、その人本来の「生き方」や「生きる意味・意志」を十分理解し、守っていくことが必要であると考えられた。

### 【本研究の臨床学的意義】

G.S.エヴァリー&J.T.ミッチェル（2004）は危機介入者が、回復の過程にある要素をいつも心に留めながら、危機の中にいる人の話を注意深く聴き、回復のための内容の要素のうち、何がもっとも有効かを見極めることが必要であるとした。さらに、PTSDの構成要因である心理的過敏性は、根底にある信念（世界観）が崩されることから起こってくるとし、外傷的事件は心の奥底に持っている大切な世界観を犯すなんらかの状況にもとづいていると述べた。本調査ではResilienceとして調査協力者たちが惨事ストレスに曝されながらも、その体験をどう「意味づけ」するのかを検討したが、6名の語り全てにそれぞれの信念（世界観）があることがわかった。援助者は、惨事ストレスに曝された者の心理療法を行うにあたって、その当事者の世界がどのような世界であったかを丁寧に捉え、当事者に沿った形で個人の世界観を再獲得する「意味づけ」の手助けをしていく姿勢が必要であると考えられる。

### 【本研究の限界と課題】

加藤（2009）は、Resilienceの力動的過程を（分子）生物学レベル、パーソナリティレベル、社会環境が相互作用する力動のなかで十分に明らかにする意味でのResilience解明は、人間の正常な発達・成長を知ることに通じ、この作業の射程は広大であると述べた。筆者も、Resilienceには、今回のインタビューで聴きとれていない「生き方」や、それに関連する様々な要因が複雑に関与しながら成長し続けている事を感じ、いかにその過程を精確に見出せるかに限界を感じた。しかし、今回得られたデータは調査協力者の生き方の大切な一部であることは確かである。今後は、データが多様な側面から分析できる貴重でかけがえのないものと改めて感じたうえで、さらに限定した側面からResilienceを検討し、その概念の精度をあげることを課題としていきたい。